

ひとりに ひとつの 哲学

みどりのくま



はじめに

このお話には、一般に哲学と呼ばれているものは含まれていない。
ソクラテスやプラトン、ニーチェやサルトルは登場しない。
だから、一般に哲学と呼ばれていることについて期待される方は、その御期待に応えることができません。素通りされることをおすすめいたします。

このお話は、私のある日のある妄想についての漫談である。
ひとときの暇つぶしとして消費されるためのお話である。



目次

はじめに

・

哲学について考えてみる

・

私の哲学について考えてみる

・

あなたに哲学はありますか

・

私の哲学、そのきっかけを話せば

・

私の哲学を実演してみる

・

私の哲学をまとめる

・

あとがき

哲学について考えてみる

哲学と聞けば、よくわからない難しい話という印象がある。

また別の印象としては、人生訓のようなものを思い浮かべるかも知れない。

受け取りかたは様々あると思うけれど、総じて何らかを教えてもらうものだと捉えているのではないだろうか。

それは自分が創り出すものと考えすることは少ないのではないだろうか。

しかし私は、哲学とはひとりにひとつずつあるものだと思うのです。

私には私だけの哲学というふうに、それぞれにそれぞれの哲学があると思うのです。



哲学とは何だろうと興味を持ったとき、たいていの場合には入門書を読んでみたり著名な哲学書に挑戦してみたりする。

そして哲学に魅せられた人は本格的に勉強を始めて、その中には哲学者となる人もいるだろう。

しかし、少なくとも私には、哲学書は総じて難解であり、まるで常識であるかのように多用される哲学用語に翻弄されるばかりということが多いのではないだろうか。

特に時代を下るほどに難解さが増して、ところどころ膝を打ちたくなることもあるけれど、すぐにまた何を言っているのかわからなくなってしまふ。

これは哲学に限らずおよそ学問というものは突き詰めることであるから、過去の業績を踏まえつつそれを超越しようとする軌跡なのです。

それを理解するには哲学の始まりから概観することにとどまらず精密に消化して行きながら現在にたどりつく営みを要求される。

それは哲学者として人生を費やした研究とならざるをえないからシロウトが安易に手を出せる領域ではないと思う。

だから一般的な教養として哲学を知りたいという欲求に応えてくれるわかりやすい入門書・解説書へと進むことになる。

ちまたには優れたものが多く出版されているから、そのうちからいくつか自分に合うと思われるものを読んでみると、なるほど哲学が言おうとしていることのおぼろげながらその形をつかむことができるだろう。なるほどそうかという満足を得ることはできる。しかし・・・。

満足感では終わらない、何か心に引っかかるものがある。

それは、なんだか肩すかしを食ったような感覚なのだ。

これは、哲学といわれるものの事を知ることができたけれど哲学それ自体が何かを教えてくれるわけではないという不満だと思う。

つかみかけた哲学はこの手をすり抜けて行ってしまった。遠いところへ消えてしまった。そんな気分を味わった経験はないだろうか。

哲学をするということは、知を愛することだと言います。

この「知」とは何のことでしょうか。

これは知識つまりは外から取り入れる情報のことを指すのではないのです。

知識とは何らかのための参考にするものであって、知識そのものに目的があるわけではないのです。

自分の手にした知識を参考にしながら「もの」を考える行為が「知」なのです。

では、「もの」とは何でしょう。これもわかりにくい。

そこでたとえ話をひとつします。

もの想う年頃という言葉があります。

この場合の「もの」とは恋のことです。

ではそれは特定の誰かのことを「もの」と言い換えることができるかと考えてみるとそれはできません。

特定の誰かは必要だけれどもそれはきっかけにすぎません。

特定の誰かを通して恋に出会い恋に魅了されて恋に落ちる。

恋をするきっかけが「もの」なのです。

ならば「もの」を考えるとときの「もの」は、考えるきっかけ、考えたいと欲求する動機という理解でいいと思うのです。

「もの」がはっきりとした目標のことではなく動機ならば、ものを考えることは終着点のない行為と言えるのではないのでしょうか。

終わりのないことをするのは苦しいことです。

苦しいけれど考えずにはいられない衝動。それが生む行為が知を愛すること、哲学することではないのでしょうか。

それでは、哲学は何も教えてくれないと不満を感じることの評価について考えてみる。

哲学は終わりのない「もの」を考える行為であるならば、それはそもそも外から与えられるようなことではないと言える。

哲学書は考える行為の記録として読むことはできても、その中から何らかの結論を読みとることで決着がつくものではないと言える。

ひとつの物語として楽しむことはできる。

しかし物語はそこで完結していない。



哲学についてここまで考えてきたことをまとめてみると、哲学とは考える行為そのものであり、哲学書とはある哲学者が哲学をした物語である。

そうであるならば、哲学書を読むことでその哲学者がどのように哲学したかを知り楽しみ感動することはできても、その哲学はその哲学者の哲学である。

つまりは他者の考えたことであって私の考えたことではない。

たとえば人生訓であるとか How-to 本であるとかは、私にとって有用な言葉や情報を得ることで完結する。

しかし、哲学書をいくら読んだところで、自分で哲学を始めなければ何か物足りない思いをかかえ続けることになると思う。

そうであるならば、私の哲学を始めたところから哲学は私に生き生きとその姿を現してくれると思う。

過去のあるいは現代の哲学者が哲学する姿をまねて、あくまでも自分で考え始めたところから哲学というものがわかりはじめるのではないかと思う。

私の哲学について
考えてみる

私の哲学というものは、哲学者が言うところの哲学ではないかも知れない。

私の哲学を哲学と呼ぶことを許さないと言うかも知れない。

学問としての哲学ではないことは、哲学の法則を踏まえていない哲学の規則を全く習得することをしていないということから明らかだ。

しかしながら、学問としての哲学をしたいというのであれば、私の哲学がどのような方法であるかということが問題なのでは無いと思う。

これは詭弁であるかも知れない。

しかし、私の哲学は私という限定を受け入れることで自由になると思う。

自由とは好き勝手とか独善的であるとかを主張するものではない。

私は私という限定を受け入れたとしても、私が社会から完全に切り離された存在とはならない。

社会の影響を受けない自由などない。

その限りにおいて自由に私の方法で哲学をするということだ。



ここで、なぜそれほどまでに自由であることを主張しなければならないかを補足してみたい。

これは私個人の話である。蛇足であると思うなら飛ばしていただいても差しつかえない。

哲学について哲学者の方法に学ぶことは必要である。

しかし、その方法が何という名前と呼ばれているのかは重要なことではない。

名前とは知識を整理するために付された見出しである。

名前を利用することで知識を必要に応じて取り出す便利がある。

しかし、少なくとも私は、その名前を知ったことでその内容についてまで理解をしたかのような錯覚に惑わされる。

名前を知ったことに安心をしてしまうのだろう。

それは、内容が難解であればあるほど、その名前を知っていることを内容を理解したことと置き換えたい願望にとらわれるのではないかと想像する。

つまりは哲学者の方法を学びその方法を実際に使うことでその方法を吸収することがなければ無意味だということへの恐れが、いつも私の気持ちを阻害する。

足がすくんで一歩も歩けなくなる。

それならば多くを望むまいと思う。

哲学者の方法を学ぶことが知識という段階にとどまるのか、その方法がたとえ他者から見て異常な使い方として嘲笑されるものであるとしても実践として私の方法となるのか。

私は後者に価値を認めるということである。

そう考えることで私は私の方法で私の哲学をすすめることができることを喜ぶ。

私が私の哲学をして、そのことにいったい何の意味があるのかという批判もあるだろう。

私にしか通用のしない哲学をしたところでそれがどうしたのだと。

哲学を普遍性があるものと捉えるならば、私の哲学など価値は無い。

しかしこのとき、価値の前提として出来上がったなにものかについて話している。

出来上がったものに普遍性があるかということだ。

私の哲学と言ったときにそれは、なにものかを指しているわけではなくて、考える行為そのものを指している。

行為に価値を置くならばそこに普遍性があるかどうかは重要ではない。

私は考える。そのことだけで価値は生まれる。

あなたに哲学はありますか

では、なぜそれほどまでに考えることを重視する主張をするのかと疑問を持つだろう。

考えることは特別なことなのかと。

それに対して私はこう答えたい。

あれこれと具体的なことを考えることや日常の必要に迫られて考えることとは別に、考える行為そのものをすることの重要性を主張するのだと。

考える行為を通して得ることのできる体験がある。

その体験を積み重ねてそれは経験となる。

その経験でしか考えることのできない出来事にこれから出会うことがあると思う。

それは常に考えることを習慣としていなければ、どうしても自分で考えなければならぬことに出会ったとき、どうやって考えればいいのかわからないという言い方もできるだろう。

哲学は目の前にある問題に答えを出してはくれない。

しかし、哲学することで磨かれた考える力は、これから出会うことに答えを出すとき必ず助けてくれると思う。

私の哲学とは、私の核になるものを育む営みでもある。



ここまで考えてきたところで、私はひとつの言葉を思い出すのです。

「お前に哲学はあるのか」

この言葉を使うときに、どこまで意識してのことかはともかく、私たちはその人の芯にあるもののことを哲学と呼んでいたのです。

私の哲学を説明しようとするこれまでの話は、いまあなたに哲学はありますかという問いかけであったことになるのです。

あると即答できる人もいるでしょう。それとも、さてどうだろうと考え込むでしょうか。

私の勝手な想像を言わせていただくならば、考え込む人のほうが多いのではないかと思うのです。

それはなぜでしょうか。



私の哲学を阻害するものがある。

それは情報の過剰である。

特に近年の爆発的な情報技術の進歩は、考えることを邪魔する働きをするように思う。

なぜならば、私が考えるよりも速く的確な答えを教えてくれるから。

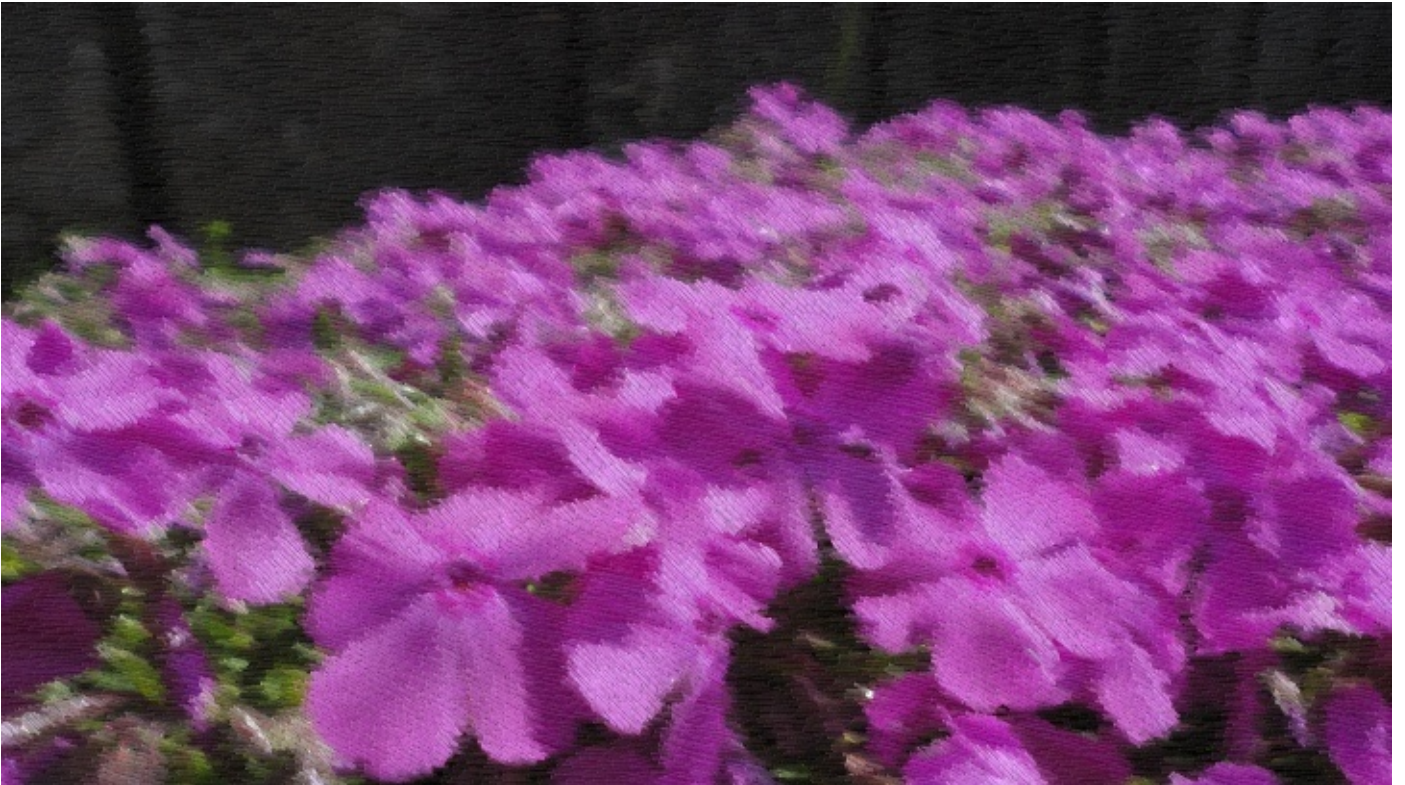
いちいち考えることなど無駄と感ずても自然なことである。

個別具体的な問題を解決するために情報を利用することを批判したり、ありきたりの文明批判をしても無意味である。

便利であることは素直に素晴らしいことだ。

そして素晴らしさの中で多くの人が無意識のうちに、ものを考える行為そのものを無駄なこととして退けているのではないかと思う。

これが勝手な想像の中身である。



自分の哲学があるかどうか自信が持てない人が多いと想像した理由として、ものを考えることをあまり重視しない人が多いと想像したことに憤慨した人もいるだろう。

あくまで勝手な想像にすぎないのでお許しいただきたい。

また、これからも技術は加速度的に発達して自分の代わりに考えてくれるヒト（モノ）がやがて出現するだろうからそれでいいと考えることもできるだろう。

だから私の哲学など不要なのだ。

そんなものはただの反動的思考にすぎないのだ。

これに完全な反論をすることは難しい。テクノロジーは人間そのものの定義をくつがえすかも知れないのだから。

だから、これからも基本的に人間はいまの人間のままでいるという限定をつけた上で先に進めさせていただくことをお許しいただきたい。

人間には今後も核となるようなもの、人格とか精神とか魂とか表現のしかたは様々であろうが、そんな人間を人間たらしめている何かがあると

する。それは先天的に備わっているもので変化することはないものなのか、それとも後天的に生み出されるものなのか、いまはわからないと思う。それはまだ未知のものである。

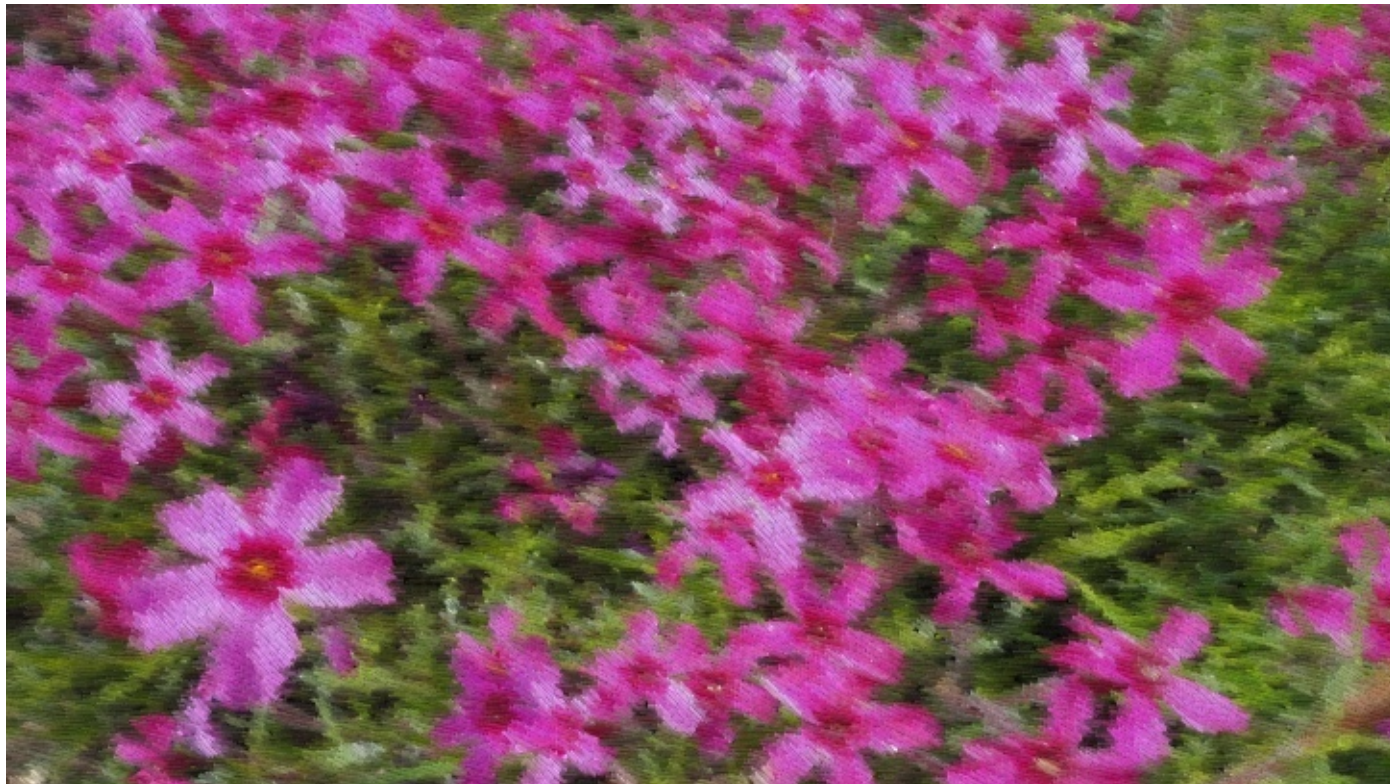
だからこれは私の考えにすぎないのだけれど、それは先天的に備わっているけれども常に磨き続けなくてくすんでしまう玉のようなものを想像している。磨くということは哲学することだと考える。

私の哲学、
そのきっかけを話せば

ここで私がなぜ哲学の虜となったのかを物語に託して表現してみたいと思う。

主人公の名は、ポプリ。

全三話。



ポプリは小学二年生。

親戚の葬儀があった日の晩のこと。

大人たちは故人を偲び、杯を重ねるほどに酩酊する。建前は後退して本音が露わとなってくる。

話題はポプリの家族に関することになる。

ポプリの兄や姉について、褒める言葉が続く。

ポプリは兄姉が褒められ喜ぶ。

ポプリは末っ子である。

ポプリは席を外す。

しばらくして戻ってきたとき、扉の向こうから聞こえてきたこんな言葉を耳にする。

「ポプリ？ああ、あれはダメだな」

体が動かなくなる。

すぐに話は全く別のことに移ったようで、騒々しい空気感だけが伝わってくる。

ポプリは部屋に入って行けない。

頭の中にはその一言だけが残り、離れなくなる。

ポプリはただ憤りをおぼえる。なぜ自分だけ差別されるのか。

ポプリはただただくやしい。あの場にいたはずの父や母は何か言ってくれたのだろうか。

もしかすると本当の子供ではないのかもしれないと考えると、ポプリは心の底から悲しい。

そうして落ち込んでいるとき、ポプリは初めて心の声を聞くことになる。

「ヒトはなぜ差別をするのだろうか」

ポプリはその声に応えようとする。

「差別をすることはとても気持ちが良いことだからではないか」

声は沈黙している。

ポプリは別のことを考える。

「差別はそのヒトの責任ではなくて、そのとき何か悪いモノがとりついてヒトの口を通して悪いことを言うのではないか」

声は失笑する。

ポプリはまた別のことを考える。

「差別をするのは、差別をしなければ自分が差別をされるという恐怖がさせるものではないか」

声は応えてはくれない。

しかし、ポプリは気づくのだ。差別とは何だろうと考えれば考えるほど理由はわからないけれど気持ちが軽くなることを。

ポプリは何事もなかった顔を装い、酔っぱらい集団の中へ戻って行く。

私は、ポプリはこのとき初めて哲学に出会ったのだと思う。

それまでのポプリは自分というひとつのものがあって、それが笑ったり

怒ったり泣いたりすると思っていた。

しかし、この体験を通して自分というものは二つあることに気がついた。
傷ついた自分とそれを冷たく見つめる自分。

ポプリは小学五年生。

ポプリは思ったことを口にして周囲を笑わせたり困らせたり、周囲からつっこまれたらおどけてみたり怒ってみたり、そんな子供に成長しました。

ある日の午後のこと。

それは五限と六限の間にある休憩時間での出来事でした。

いつものように数人で教壇の脇でふざけていたとき、ポプリが発した言葉に友人がつっこみをいれました。

ポプリは不思議なことに、いつもなら適当にボケて笑いを誘うところなのに、このときリアクションをとることをちゅうちょしました。

そして、あの声がこうささやいたのです。

「ここは、冷淡を装うほうがいい」

友人は、いつもならすぐ何か言い返すはずのポプリが何も言わないことに戸惑っています。

ポプリは、がっかりしたような顔の友人を見つめながら心声を聞きました。

「そうやって目立つことをするからいろいろイヤなことを言われるのだ」

「ありがたくないレッテルを貼られることは損なのだ」

「もっとかしく立ち回るほうがいい」

「もの静かな演技をすることで面倒なことは回避できるのだ」

一瞬のこととして言葉にもならない速度で自問自答したのです。

場はしらけて、ほどなく授業が始まりました。

しかしポプリは上の空で考えていました。あれは何なのか。

ポプリはそれ以来あまりしゃべらない子供になりました。

私は、ポプリの中にある自分を見つめるものがちょっとしたイタズラを仕掛けたのだと思う。

お茶目に振る舞うポプリに対して「本当にそれがお前の望む自画像なのか」と問いかけたのだと思う。

無理してキャラクターを作っているのならそんなものは長続きしないと警告したのだろうと思う。

しかし、本当に重要なことは、これを機会にキャラクターを変更してしまった事実ではなく、どうしてふいに現れて試すようなことをささやくもう一人の自分がいるのだろうかと考えようになる変化があったことです。

ポプリが当時を振り返ったならたぶんこう言うのです。

「いまでもあの夕方の窓から差す傾いた光とそれに照らされて椅子に腰掛ける自分の姿をおぼえています。両の手をひざがしらにつっぱって黙り込んだ自分からのびる長い影があざ笑うようにゆっくりゆらめく幻としておぼえているのです」

私は、このときポプリは自分の哲学をはっきりと自覚することになったのだと思う。

それは、いつまでも残像としてそのときの風景が残っていることが、それ以来の哲学の出発点を記念する象徴として自らに与えたものだと思うからだ。

私はここでまず、ポプリの思春期を語らない理由を述べておかなければならないと思う。

それは中学・高校時代とすることができるだろう。

もの想う年頃というのは恋に恋する時期であると述べた。恋に限らず思春期というものは甘美な話題に走りがちな時期だと思う。

それは、幼少期の夢から醒めて世の中の現実を目の当たりにして、しかし心がそれを受け付けずただ殺伐とすることに対する自己防御なのだと思う。

ポプリはこの時期、自分の哲学から遠ざかる。

ポプリはただ日常のふわふわしたことに身をゆだねて流される。

ポプリは大学生になった。

独り暮らしにも慣れて、知り合いも少しずつ増えてくる。

ある日、サークルの知人からおもしろい集まりがあるから来ないかと誘われる。

気楽についていったところで衝撃を受ける。

責任者と名乗る人物が現れてポプリは個室に連れて行かれる。

そこで二人きり。

責任者は次のような主旨のことをまくしたて始める。

「あなたは、今日生まれ変わるのです」

「今までのあなたは偽りのあなたです。本当のあなたにこれから出会うこととなります」

「私たちにはそのノウハウがあります。あなたは私たちを信じることで」

「今日あなたが私たちに出会うことは必然だったのです。必然に従うのです」

相手は理路整然とポプリを支配しようとする。

ポプリには論破することができない。

一人きりだから誰かに相談することはできない。

ポプリは自らを喪失しそうになる。

そのときポプリの心に浮かび上がるものが。

自分を冷たく見つめる自分が現れる。そして言う。

「ペラペラとよくしゃべる奴だ。こいつ何様のつもりだ」

「こんな奴に言われるままのお前はクズだ」

「何も言い返せないのなら、こいつの言いなりになってしまえばいいだろう」

ポプリは思うのだ。前触れもなく現れて、そのくせ助けてくれないのか。

自分を冷笑する自分はこう言う。

「お前は他人の言いなりになることがくやしくないのか。くやしいなら理屈なんかじゃなくお前の気持ちを叫んでみる」

ポプリは考える。くやしいくやしいくやしい。

ポプリはさらに考える。

これはシステム化された何かの勧誘なのだろう。

考え尽くされた論理に、思いつきの論理で対抗することは困難である。

すると、論理を超越するものを導入すればどうか。

ここは、「神」という概念に助けてもらうのはどうだろう。

たとえばこうだ。

あなたの信ずる「神」のことはよくわかった。しかし私には私の「神」が御座います。

私の「神」はあなたを拒絶しております。

ゆえに私はあなたに従うことが出来ません。

あなたのご厚意には深謝いたすところではありますが、あなたは残念ながら私を救うことは出来ないのです。

私の言ってること、わかりますか？

よし。これを相手がうんざりしてあきらめるまで繰り返してみたらどうか。

ポプリはそう考えて実行する。

相手はそんなことには惑わされず勧誘を繰り返す。

事態はもはやただの意地の張り合いに成り下がる。

そうなれば根気で負けなければいいことになる。

こんな泥仕合に相手はそろそろ面倒くさくなってくる。

場は白けてくる。

相手は最後の捨てセリフを吐いて、ポプリはめでたく解放される。

ポプリは思うのだ。

世間は恐ろしい。くわばらくわばら。

私は、ポプリはこのとき自分の哲学を再発見したのだと思う。

人にはその人の人格を問われる体験をすることがある。そうしたとき人格である核となるものを支える哲学の存在を思い出すのだ。

三つの物語を通して表現したいこと。

それは、その人それぞれの体験を通して、人は哲学と出会い哲学を自覚して哲学を再発見する。

そしてそれ以降、自分の哲学と歩み始めるのです。

これは私が哲学の虜になった説明のために創作した物語であるから、現実離れたフィクションのばかばかしさがあることはお許しいただきたいと思う。



私の哲学というものが有効である説明を重ねたい。

日常で出会う個別具体的な問題を解決するには個別具体的な技術で対処することが求められる。そのことに異論はない。

しかしそのとき、自信を持って冷静でいるための土台となるものはやはりあったほうがいいと思う。

私はそれを誰にでも備わっているけれど常に磨き続けないとくすんでしまう玉というイメージで表すのだけれど、その磨くという行為はたとえ答えは永久に出ないかもしれない問題だとしてもふいに浮かび上がる問いを真剣に考えることだと思う。

具体的な何かの目的のために考えることとは別の考えるために考える行為。

それが私の哲学をする行為である。

これは人が生きてゆく上で役に立つと思うのです。

私の哲学を実演してみる

ここで、私の哲学を私が実演することを仮想的に示してみたい。

前章での物語中で、きれぎれにそれは現れていたのだけれど、ある程度まとまった形で示す必要があると思う。

言葉でどこまで、実際には頭の中で行われる言葉以前のイメージや個人の体験によって有意と思いこんでいるイメージを含む活動を表現できるかという問題はある。

しかし、不完全な試行であっても、主張を構成する部品としての実際ということは不可欠だと思う。

そういう理由付けをして、ひとつ題を立てて哲学してみる。

それは誰でも一度は考えてみたことがあると想像する、そして私にとって事あるごとに考えさせられる課題である〈自死〉について。



人はある程度生きていると、死にたくなる経験をしたことがあると思う。また、世の中では実際に自ら命を絶つことが毎日のように起きている。そうした話題に接したとき、悲しいとか怖いとか許せないとかかわいそうとかいろいろな感情がないまぜになって襲ってくる。

その人に同情することもあれば理解できないこともある。

また、身近に死と接する経験のあるなしでも変わってくるものはあるだろう。

私の場合はどうだろう。

想像してみる。

私は、死にたいと思った経験を思い出してみたとき、そこに必ず死にたいと思った瞬間に死ぬわけがないと思う自分がある。

死にたいと思う自分を冷笑する自分が必ず登場する。

「お前は死ぬ勇気など無いのだ」

あざ笑う自分がそこにいる。

死ぬことが勇気かどうかはひとまず置いておく。

あざ笑う自分が例外なく登場するのはどうしてか。

すると、私はたまたま死ぬしかないような経験をしたことがないだけではないかとわかる。

ただ単にこれまで幸運だっただけのことで、本当に死ぬしかない経験をこれからしたとき、そのとき死を思いとどまる自信は無いことに気づく。

そこで今度は、さきほどひとまず置いておいた、死ぬことは勇気かという問いを考えてみる。

すると、私には死ぬ勇気は無いとわかる。

死ぬことは怖い。

私にはとても自分の意志で死ぬことなどできそうもない。

私に死ぬ勇気が無いということは私の本心の叫びであることがわかる。

死ぬくらいだったら何でもして死をまぬかれないと心の底から絶叫する自信がある。

ここで私は気づく。

私は矛盾を抱えている。

本当に死ななければならぬ状況に追い込まれたとき死を思いとどまる自信の無い私と死をまぬかれないと泣き叫ぶ私。

この二つの私はどうして私の中に共存することができるのか。

ここで壁に突き当たる。わからない。

こうした行きづまりを打開する方法は、他者の経験に助けを求めることがよいのだ。

哲学は一時停止して、自殺を扱った本、特に遺書を扱った本をいくつか読んでみる。

死ななければならぬ体験をして自ら命を絶つとはどういうことか想像しながら読む。

そして、ひとつの思いが浮かび上がってくる。

死にたくて死ぬ人などいない。

それではなぜ死ななければいけなかったのか。

それは、自分以外のために自分は死ななければならなくなるのだ。

死を選ぶということは、自分が生きてはいけけないと思うことなのだ。

生きていては済まないと思うから死ぬのだ。

自分以外というものは具体的には人それぞれ違うだろう。

しかし、自分が生きていては迷惑をかけてしまう存在のために死ぬのだ。

死を選ばざるをえないことは最大の悲劇であり、死を美化することは許されない。

しかし、ひとつだけ言えることがあるとするなら、本当に孤独な人は死を選ばないのではないか。

それは、自分のために死ぬことは無いと思うからである。

もちろん本人は孤独を確信していたのかも知れない。

しかしそれは、たとえ潜在意識の底に深く深く沈潜していたのだとしても、本人以外の何かを守るために死を選んだのだと思う。

それは、責任感の強い人であると言うことができる。

自分以外のことに関心が至る人であればあるほど死に近づくと言うことができるかも知れない。

私はそう考えることで、現実残酷であることを思い知る。

現実には容赦が無い。

しばし、あんたたる思いに沈む。

しかし、哲学を再開しなければならない。

私に立ち返り私の矛盾のことを考えてみる。

そしてひとつの考えが浮かぶ。

死にたくないと絶叫する私は、私のためだけに叫ぶのだ。

死を思いとどまる自信の無い私は、私が生きてあらゆることをしてもどうすることもできない何かがあることへの恐れだ。

この二つの私は、全く別のものを見て全く別のことを考えているのだ。

だから私の中で矛盾せず共存していられるのだ。私は・・・。

私の哲学を例示してみた。どこまで表現できたかは読まれた方の判断にお任せせざるをえない。

また、これは哲学であるから何一つ結論は出てこない。

また、これは哲学のある断片を取り出して見たものにすぎない。哲学は考える行為のことであり、それに終わりはないのだから。

そのように言った舌の根が乾かぬうちに矛盾することを言うようで恐縮なのですが、自死について考えたとき強烈に想起されたイメージが頭を離れない。個別具体的なことで、本論から逸脱していると思うけれど触れておかずにいられない。それは怒りの感情だ。だから、以下は読まずに飛ばしていただいても問題はない。

人は何かのために不幸にして自らの命を絶つ。

では、たいした理由もなく他者を殺すのはどういうことなのか。

ある現象の一群が浮かんでくる。

「死にたいと思ってやりました。殺すのは誰でもよかった」

当てはまる出来事はいくつもある。個別のことを批判することは私に出来ることではない。

また、なぜそんなことが可能なのか私には解らないし不愉快極まりないと深く考えることはしてこなかった。

しかし、自死について考えていたとき怒りの感情としてわきあがるイメージがあった。

そうか、彼らは本当の孤独な存在であったのかと。

死にたくなるとき、自分しかない人間に死ねるわけではないのだ。

彼らの心は死にたくなると絶叫するであろう。そして自分以外がないのだから何かのために死ななければならないと考えない。結果として死を選ぶことはできない。

しかし、それは恐ろしいことだが、自分以外の何者とも関係性は存在しないと確信するならば他者を殺すことに何のちゅうちょも覚えないだろう。

彼らの中で一つの論理が成立する。

それは、自分を殺すために他者を殺す。他者を殺すことで法律という誰にとっても公平であるはずのものが自分を殺してくれる。

そう思いついたときそれを否定する考えは彼らにはなかったのではないか。その先はただどうすれば実現できるかに興味は移ったのではないか。

これは、本来は自分に向かうべき殺意を他者へ転化させることで合理化したつもりになる身勝手な言い訳であると思う。こんなことに巻き込まれるなど悔やみきれないことだ。

腹立たしさとともに、これはこれからも起こりうることだという無力感がある。私にはどうすることもできない。

私の哲学をまとめる

話がもうすこしだけ寄り道することをお許しいただきたい。

それは私の玉イメージの原点である。

子供というものは、生まれながらの哲学者だと思う。

好奇心が旺盛で、何にでも「なぜ？」と問いかける。

心に浮かぶ疑問に正面から取り組もうとする。

しかし、大人はそうした「なぜ？」につき合いきれないと思うことがあるのではないか。

何の役にも立たないことを真剣に思い悩むことをつまらないことだと切り捨てる。

子供の頃の無垢な哲学する心は、大人になるにつれてさびついてしまうのかと思う。

さびしいことだけれど、それは仕方のないことだと考えるだろう。

しかし、少々さびついたかも知れないけれど、この生まれながらに持っている哲学する心をいまさらと言わず磨いてみてはどうかと思うのです。

子供の頃に戻ることはできないけれども、子供心の残像くらいならなんとか見えてくるかも知れない。

そう考えることで希望という言葉が浮かび、気分が良くなる。



全体をまとめてみる。

私という人間には何やら核になるものがある、それを絶えず磨き続けるためには考え続ける必要がある。

日常の個別具体的なことについて考えることとは別に、考えるために考える習慣を持つてばいいのではないか。

その習慣のことを、私の哲学と名付ける。

それは私だけの哲学であるから、学問的哲学の方法にとらわれる必要はない。

なぜ核のようなものを磨き続けなければならないと考えるかといえば、磨くことで核は輝き私の芯がしっかりと浮かび上がり、それは私の自信となる。

自信を持つことはさらに考えることを後押しして、そのことで核はさらに磨かれて輝きを増す。

この循環を、過酷な現代を生きる人間は、必要としているのではないかと思う。

だからそれぞれの哲学を立てることをおすすめするのです。

ひとりひとりが哲学を立てることに意味はあると思う。



あとがき

このような取り留めのない漫談にお付き合いいただきましてありがとうございました。

私は、日々生き惑うのです。

私にとって生き難さの原点にさかのぼる行為は、自らの内面への探索です。

しかしながら私は、自らの弱さにより最終的な答えを外部に求めることへ逃げたくなります。

だから私は、自らの弱さを克服するために哲学という名前が持つ強さにあこがれ続けます。

それが、私が哲学という名前にこだわる理由です。

私はすべての生きる行為の原点に哲学があると信じることで、かろうじて生き難さと向き合うことができると思います。

このような私のお話が、あなたのひとときの暇つぶしとして楽しんでいただけたなら幸いに思います。

2015年4月　みどりのくま

ひとりにひとつの哲学

<http://p.booklog.jp/book/97432>

著者：みどりのくま

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ktnwtuy001/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97432>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97432>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ